

死にかけて全部思い出しました!! 4

ソヘイル

エンデールの双子の兄。
乙女ゲームの幻の攻略対象で、
人間離れた美貌と
焔の力を持っている。

斎宮

バスチアの神域で
祈りを捧げる女性。
パーティミアスが
幼い頃は一緒に
暮らしていた。

テオドーロ

バスチアの王弟の息子。
クリスティアーナ姫から
王位継承権を
奪おうとしている。

イリアス

パーティミアスの元護衛で、
謎の多い人物。
禁忌とされる「七つの力」を求めて
彼女のもとを去ったが――？

クリスティアーナ

バスチアの第一王女で、
乙女ゲームのヒロイン。
妹のパーティミアスを心配する
可憐な美少女。

ニジー・ジン

王魚と呼ばれる神様の孫。
時おり王魚の「伝言係」
としてパーティミアスの
もとを訪れる。

パーティミアス

バスチアの第二王女で、
乙女ゲーム
「スティルの花冠」の悪役。
前世を思い出して以来、
波瀾万丈な人生を送っている。

エンデール

ラジャラトスの皇太子。
女嫌いでは有名だが、
パーティミアスにだけは
特別な思いを抱いている。

かみさま。たすけて。それは祈りだった。それは縋る思いだった。助けは来ないと知りながらも、
そう縋った。

それなのにどうしてだろう、脳内に浮かぶのは——縋る相手の姿は、赤い髪を翻す人間で。

金剛石のように、乱反射する虹色の光を宿す、銀の眼をしたあの子で。

狸々緋の髪をかき上げたあの子は、振り返って手を伸ばしてくれるのだ。

彼女はここに来ないと、わかっている。だというのに、その幻に縋ったのは、いつも本当の危機
に、なりふり構わず駆けつけてくれるからだ。

かみさま。かみさま。

たすけて。こんなのはいや、まだしにたくないの、どうしてここでしなくてはならないの。

涙がこぼれ落ちていく。祈りも望みもこれとはちがう——ただ思う。
たすけて。

「さようなら、バスチアの直系。闇の娘」

男が笑う。あの子の護衛だった、あの子の唯一無二だった男が、どうしてか。

剣が振り下ろされる。もう間に合わない、誰も助けは来ない。
かみさま、かみさま。

「ためえなんぞの好きにさせてたまるかよ！」

眼を閉じた途端に、誰かの咆哮が炸裂し、世界を震撼させた。同時に、天井を貫く落雷。強烈な青をまとう雷光がひらめく。鮮烈な光、不吉な雨雲と共に現れる苛烈な一閃。一瞬で男をひるませた信じがたい一撃。石造りの床が砕け散る。

「あ……」

声は出てこなかった。落雷と共に現れた青年が、どうやってここに来たのかわからない。まるで落雷に飛び乗ってきたかのようだ。

猩々緋の髪と、雷がもたらした炎が、風を受けてびようと翻る。ひらひらとひらめいている絹糸のような細い髪の毛。それを不作法に長々と垂らして、現れたその人は大胆不敵に笑う。

戦意の塊と言ってもいいその人は、にいと唇を吊り上げた。

その人は乗っていたものから降り立った。それは剣で、つばの部分に足をかけて乗っていたらしい。

それを見た途端、鳥肌が立った。

それは圧倒的な力を宿した剣だった。雨雲を呼ぶ水の力と、稲妻を光らせる光の力に満ち溢れて

いた。

そして、それらが招き寄せる闇を含んだ剣だった。

その人は剣を片手に収めると、皮肉な顔をして笑う。

「いつまでも来ないから追いかけてやらせてもらった。やっと追いついたのに何、その顔」

「水に光に闇ですかい。これはまた厄介な力をお持ちだ」

「そう。人魚の水と希望の光。光の傍らにあるという虚無の闇」

彼らの会話は意味がわからない。二人は意味のわからない言葉を投げ合っている。

「あなたに対抗するだけの力は併せ持っているの。終わらせましょう、イリアス」

その言葉は妹の言葉そのものだった。

けれどその人はあまりにも男性的だった。かっちりとした直線的な体。鋭い双眸。冬の厳しさを思わせる唇。強固な意志を示す眉。

それらを持ち合わせたその人は、妹にどこか似ていたけれど、あまりにも違っていた。それでもわかった。双子のつながりが知らせているのかもしれない。

この人は妹だ。……なぜか、男の姿に変わり果てているけれど。

「真なる剣をお持ちとは。あんたはつくづく災厄に恵まれている」

「その筆頭があなただっご存知？」

「まったく。そうですねえ、終わらせましょうか。あんたを倒せば六つの力が揃う」

「倒されはしない。倒すのはあたし」

互いの剣が不気味にカタカタと揺れ始める。膨大な力をため込んでいるかのよう。

剣が明滅を始める。猩々^{しやうじやう}緋^ひの髪を揺らして、その人が構える。

剣が求めているものは、戦うという意思だとしてかわかった。

「いざ、参る」

何かにけじめをつけるようにその人は言っ、イリアスと呼びかけた男に剣をぶつけていった。

* * *

雨の音で目が覚めた。宿の二階で寝ていたあたしは起きて、窓の外の何日もやまない雨を見る。イリアスさんを追いかけると決めたあの日の翌日から、砂漠は雨に包まれた。

人の話を聞く限り、およそ二年ぶりの雨季が訪れたそうだ。

それもただの雨じゃない。叩きつけるような大雨である。バスチアで見たことのある雨なんて、この雨の前ではただの霧と思えるほどだ。

……死にかけて、前世を思い出してここが乙女ゲームの世界だと気付いてから、本当に色々ありすぎたわ。思い出してすぐに、隣国の皇太子エンデル様^{エンデル}にさらわれた。さらわれた理由はあたしが化け物退治に必要な古代文字を読むことができたから。

化け物を退治できた後、エンデル様との婚約が決まったと思ったら、誰かの策略によってお姉様と中身が入れ替わってしまった。

中身が入れ替わったのは邪悪な力のせいだから、とケガレを取り払うべく聖なる島に向かえば、今度は海賊にさらわれたり。別件でさらわれていたお姉様を助けるために、彼らの仲間になったり。ケガレを浄化するために向かった島で、お姉様が生贄^{いけにえ}になることを阻止するために奔走したり。そして最終的にはあたし自身に邪悪な力が宿っているとされて、罪人として遠い遠い西の大陸まで飛ばされてしまったり。

そんな波乱万丈、一代記でも作ったらベストセラーになりそうな人生を、あたしはたどっている。そして今は、イリアスさん……死にかけていたあたしを助けてくれて、そして見事なほど私利私欲で裏切ってくれた人に引導を渡すために、あたしは生きている。

砂漠の多いこの地方で、この時期に旅を始める愚か者はいないらしい。

砂漠は雨水を大量に含むけれど、木とか森とかそういう雨をため込む装置が何もないから、水は一気に流れていく。つまり簡単に大洪水が起きるのだ。

雨がやみ、水がどうにかなくなってからじゃないと、ただの人間には何もできない。

この宿で出会ったソヘイル……隣国の処刑されたはずの皇子様で、乙女ゲームでは幻の隠しキャラという設定だった人……は人じゃないらしいけれど、それでもこの雨の中わざわざ外に出ようとはしなかった。

つまりそういうものなのだ。

追いつけなかったらと思うと不安でしょうがない。ソヘイルの予想が外れたら、イリアスさんがどこに行くかなんてもうわからないのだ。手掛かりは何もなくなる。

前世の記憶なんてなんの役にも立ちほししない。こういうことはゲームの中では起こらなかったからだ。

もし間に合わなかったら。イリアスさんを止めることができなかつたら。ぐるぐると取り留めもなく考えてしまう。

それともう一つ、あたしは気になっていることがあった。

夢を見るのだ。あたしが人を捨ててイリアスさんを追いかけ、そして最後には討ち果たす夢だ。その夢の中のあたしは、男かも女かもわからなくなっていて、ただ圧倒的な力を使う存在として立っている。そして恐ろしいことに、イリアスさんを倒してから人間らしい感情までもが徐々になくなっていくのだ。

死なない体と人の道から外れた倫理観。渴望するの剣をふるう場所。

あたしはそんな、生き物かどうかわからないものになっていく。

誰にも心を開かないで、一人大地を彷徨うのだ。永遠の孤独を抱えながら。

その夢を繰り返し見る。何度も何度も見ているから、夢の内容を詳細に思い出せるくらいだ。

片手の数を超えたあたりで、普通の夢じゃないことに気付いた。

なんとなく……察しているんだけど、これはたぶん。

あたしが人を捨てることを選び、それを全うした後の未来だ。

イリアスさんを失って、自分を殺して選んだその先の未来だ。

正直に言えば怖い。

誰からも化け物とののしられて、戦場に赴いて体を血で濡らして、自分の欲しい戦いだけを求めて生きていくのは、今のあたしには怖いものでしかない。

それともそういう感情さえも、人を捨てた時点でどこかに行ってしまうのかしら。わからない。

——人を捨ててもイリアスさんを止める。

そう決めたはずの思いは、最近になって揺らぎ始めてしまった。

こんなこと誰にも言えないから、あたしは一人この不安を抱えている。

「バーティ」

一階の食堂から戻ってきたらしいソヘイルが声をかけてくる。

「何」

「やめるなら今のうちだぞ」

顔を見るなりそう言われた。あたしは顔に出るほど不安がっているのか。

「やめるって何を？」

「迷いがあるのならば、あの男を追うのはやめておけと言っている。あの男はこの身に任せろ。お前ほどの人間ならば、平凡な幸せはいくらでも手に入る。それ以上のものも手に入れられるだろう」

あたしは一瞬黙った。

迷っているのは事実だけだ。

「いや。あたしはイリアスを止めるの」

揺らいだ意思をねじ伏せるために、そう口に出した。

「一体何がお前をそこまで縛る？ ただの親しい男というだけだろう」

「あたしは何度もあの人に助けられたわ。だからあたしはあの人を止めるの。このままじゃいけないのはソヘイルだってわかっているでしょう？ あたしは助けられたから止めたいの」

あの人が、イリアスさんがこのまま何かを続けて、取り返しがつかなくなる前に止める。それも救いの一つだと信じたかった。

「あたしはあの人の最後になるの」

ソヘイルが黙って外を見る。そして目を心持ち開いた。

「どうしたの……？」

あたしも窓の外を見て驚いた。

この西の大陸の衣装とは違う衣装を身にまとった誰かが、視界を遮るほどの大雨の中に立っていた。

土砂降りの雨の中に立っていたのは――

「うそ」

あたしは立ち上がって階段を駆け下りて、外に出た。途端に雨が体を濡らしていく。

相手の顔がちゃんとわかるくらいまで近付くと、あたしの勘違いじゃないことが証明された。

「よお、久しぶり」

にかつと笑ったその人を見てあたしは言った。

「どうしてここにいるの、ニイジー・ジン」

あたしが一時的に仲間になった海賊船の頭で、王魚の孫だと自称する彼が、立っていた。

「元氣そうな面してて安心したぜ」

あたしの疑問をまるで無視して、彼はいつも通りの明朗な声でそう言った。

「なんでここにいるの、ここは海から遠いのに」

「雨がこれだけ降ってりや来れるぜ？ 水の力がかなり強いからな」

「意味がわからないわ」

「この土砂降りの雨があれば、王魚の血族はその場所へ飛ぶことができるって言うてるんだ。瞬間移動ってやつに近い」

「噛み砕いた説明ありがとう。それで、ここに来た理由は何？」

「そうそう、お前にじいさまからの伝言」

「王魚から……？」

「おう。あの神魚は湖から動けないんだぜ、だから人使いの荒いこと荒いこと。まあ愚痴はさておいて」

ニイジー・ジンが半分笑っていた顔を真面目なものに変えた。

「今からオレが言うことは王魚が知る真実だ。嘘か真かお前が決める」

「聞いて信じなくてもいいの」

「伝言係にとつてはそんなのどうでもいいんだよ。伝えるのだけちゃんとするれば」

「なら聞くだけ聞くわ」

「そんなじゃ行くぞ」

一呼吸して、彼が語り始める。

「お前がイリアスだと思っている人格は、イリアスじゃない」

「え……？」

「その人格は聴禍の風。七ツの瞳の一部だ」

イリアスサンガ ナナツノヒトミノ イチブ？

「じゃあイリアスって誰なの」

聴禍の風に体に乗っ取られた人は誰なの。

「荒野のイリアス。世界を渡り歩く傭兵で戦場狂い」

あたしはふとソヘイルとイリアスさんの出会いを思い出した。

ソヘイルもイリアスさんの名乗りを聞いて言った。戦場狂いと。

「それで剣の主。王魚が封じられた真なる剣の対の剣、かがみの剣の主。剣の求めるままに戦場を

渡った、剣と相思相愛の男。生半可な男じゃなかったぜ。乗っ取られる前に会ったことあるけどす

げえおっかなかった。敵に回したくなかったぜ。顔見て逃げることにした」

オレの評価なんてどうでもいいかと笑って、ニイジー・ジンは続ける。

「それは七年前のこと。荒野のイリアスは剣以上の力を求めた。なんでかは、じいさまどうでもい

いらしくて気にしてなかったし教えてくれなかったけどな。まあ求めたんだよ。かがみの剣だけで
も非常識な力を持っていたんだけどさ。人間ってなんで手に入れた力だけで満足しないのかね、そ
んなのどうでもいいか」

「待ってよ、イリアスさんは『十八年前に一回壊れた』って言っていたわ。七年前まで荒野のイリ
アスという人格を保っていたなら計算が合わない」

「順番に話すから聞いておけって」

あたしの疑問をそうやって一回脇に置いて、ニイジー・ジンが続ける。

「んで、その強欲が、体をなくして彷徨っていた聴禍の風と共鳴した。そして荒野のイリアスは、
それを宿してしまったんだ。結果どうなったか？ 聴禍の風に体に乗っ取られた。そして本来の魂
は奥底まで追いやられた」

「共存はできなかったの？ ソヘイルのように」

「ソヘイル？ ああ、七つの一つ、災厄の炎とつがいの皇子様か。あいつとイリアスの違いはなん
て言ったらいいんだ？ うう……ソヘイルは炎に全部くれてやってもいいと思った。だから炎は共
存の道を選んだ。でもイリアスは聴禍の風に全てをくれてやろうと思わないで、自分に寄生しよ
うとする風を拒否した。そんな感じだな」

災厄の炎と共に生きようとしたソヘイル。

聴禍の風と生きることを選ばなかったイリアスさん。

二人の違いはそこらしい。

「話戻すぜ。風は七年かけて体のほとんどを乗っ取った。ここで十八年前のことが出てくる。十八年前、聴禍の風は別の人間の体を乗っ取ったんだ。だが、その時は乗っ取った体をオレの親父に完膚なきまでに破壊されたんだよ。だから今回は慎重に七年もかけたんだ。王魚の血族に邪魔されなようにな」

王魚は七ツの瞳の再生を望まないという、前に夢の中で聞いた言葉をここで思い出した。

『十八年前に一回壊れた』っていうのはイリアスさんじゃなくて風の言葉だったのね。

「風はそうして常に表に出るようになった。乗っ取られた体を取り戻そうとする元の魂を何度も殺してな」

「魂を殺すって……」

「魂が体とつながっているのは理解できるだろう？ 体が致命傷を負ったら魂も同じだけ衝撃を受けるんだ。風は普通なら死ぬはずの傷を何度も負った」

「それなのになんで生きていられるの」

「七ツの瞳の力を一つでも手に入れると、致命傷でも治るんだ。でも魂はそうじゃない。衝撃をちゃんと受ける。死にそうになって、でも体が生きているからかろうじて生きる。それを繰り返すと、魂の自我が崩壊する。三回もやればほとんど崩壊して、体を生かすためだけのものになるんだ」

ニイジー・ジンがそこで一息ついた。

「オレが見た感じ、あいつ十回はそれやってるぜ。そりゃ体も腐るわけだ」

体の崩壊が進む。夢の中でそんなことも聞いた気がした。

「だから聴禍の風は完全体になろうとしている。完全体ってのは七ツの瞳だ。完全体になれば、体が腐るなんて喜劇は起こりっこないからな」

「……」

その時だった。すさまじい音があたりに響いた。あたしは音のした方を見て、目を見張る。一瞬だったけれど、遠くで炎の柱が立ち上ったのだ。

「今あいつは三ツ目の力を完全に手に入れた。災厄の炎をな」

災厄の炎は、この西の大陸の地下迷宮に封じられてたんだ、とニイジー・ジンが語る。

「一部はそのくびきを逃れて、あちこち彷徨って封印を解く手段を探してたみたいけどな」
ちらりと彼が見やるのは、軒先のりばにいるソヘイルだ。あたしを追ったらしい。

……ソヘイルに憑りついていたウルムが、災厄の炎の一部だったということなのだろう。
炎の力であり、ちよつと女の人が苦手な存在。

大斧を軽々と操る、大酒飲みの蟒蛇。

ただとても、ソヘイルを大事にしていたらしい、彼の相棒。

「……」

「王魚は七ツの瞳を許さない。あれはあつてはならなかった禁断の力だ」

ここまで言うのなら、何かしら、あたしにさせたいことがあるのだろう。

「あたしに何をさせようというの」

「お、話が早くて助かるぜ。一緒に来てほしいんだよ。王魚の封じられた神域まで」
なんてことはないように、ニイジー・ジンがそう言った。

「行ってどうなるの」

「それはじいさまが話すことだ。オレはただの伝言係と案内係」
「待て」

その声を聞いて、ソヘイルが脇に来ていたことに気が付いた。

「ソヘイル」

「バーティが行くならば、この身も連れていけ」

「ああダメダメ、あんた炎だろう。神域は水の力が強すぎる。あんた消えちまうぜ」

あっさりと言った。

「行ってみなければ」

「人を捨てて炎の一部になった男が何言ってるんだよ、この雨の中に立っているだけでも瀕死状態のやつを連れてくほど残酷にはなれないぜ」

あたしはソヘイルをよく見た。

ソヘイルは青褪^{あおざ}めていた。見るからに血の気が引いていて、いつもよりずっと倒れそうで、頼りなさそうだった。

「雨に濡れれば濡れるほど、ソヘイルの顔色は悪くなっていく。」

「ソヘイル」

「なんだ」

「あたしは行くわ、でもあなたは来ないで」

「なぜだ」

「あなたに消えてほしくないからよ、あたしの恩人に」

「……それを言うのか」

「言うわ」

ソヘイルはじつとあたしを見て、それから言った。

「この先どうなってしまうても、一つ忘れないでほしい」

「何？」

「お前を愛する者がいるということだ。お前が何になっても、どうなっても、寄り添っていたいと思う相手がいることを忘れてはならない」

「……ソヘイル？」

「この身の弟がそうだからな。エンデールはお前がどうなるうとも愛するだろう。それを忘れるな」

ソヘイルはそう言って少し微笑んだ。

「弟の思い人をさらっていつてしまうほど、この身は弟が嫌いではないのだ。だから行け。もしこの身が先にあの男を見つけたら、炎に伝言を託す。だから安心しろ」

「炎にどうやって託すのよ」

「お前がこの身のことを知ろうと思つた時は、火を熾せばそれだけで伝言が伝わる」
そう言うてから、ソヘイルは軒下に入った。そして大きく息を吐き出し、しゃがみ込む。
かなりつらいらしい。

あたしはそんな彼を放っておきたくなかつたけれど。
「行くぞ」

ニイジー・ジンに手を取られて、あたしは跳んだ。

着いたのは見覚えのある場所だった。静かな湖は水面が鏡のように凧いでいて、空の青さをどこまでも映し取っている。

そうだ、ここは間違いない。

「ソフィアヤの神域……」

ラジャラウトスの夏の首都ソフィアヤにある、王城の奥深くの神域だ。あたしが化け物退治の手掛かりを探していた時、「まれなる満月」というランプのありかを聞きに来た場所。

「そうだ。じいさまが封じられている場所さ」

ニイジー・ジンがこともなげにそう告げた。

「待っていたぞ、わが女孫にして跡継ぎよ」

じょうじょうと響く不思議な声。人とは全く違う気配をまとつたその魚は、人にはできない笑み

を浮かべてあたしを見やった。

鱗の肌を持った美丈夫。でも乳房の膨らんだ、とても不思議な神代の魚。

その目も何もかもが人間らしくない。それも当然だった。だって王魚は人のような姿をとつてい
るだけ。

人智を超えた、神代の存在だもの。

「へえ、跡継ぎ跡継ぎって言ったのパーティのことなんだな」

感心した様子で言うニイジー・ジン。それに頷く王魚は、どことなく親愛の情というものを感じ
させた。あたしの目の錯覚かもしれないけれど。

「お前はあまりにも父親の血を引かなかつた。母親の血が濃い」

「ああ、七つの民の血だろうじいさま。しょうがないじゃないか。どっちの血を濃く受け継ぐかな
んて子供にはわからないんだから」

「さよう、まあお前はそれでもかわいいわが孫だ」

ニイジー・ジンの言葉に王魚が微笑み返す。

ニイジー・ジンはくすぐつたような顔をした。

「さて、茶番劇は終わりにしよう」

王魚はそう言うて、あたしの方を見た。

色のわからない瞳がじつとあたしを眺める。

「聴禍の風を止めたいと望んでいるらしいな？」

あたしは背筋を伸ばした。まっすぐに王魚を見返す。

「あの人を止める手段はどこにあるのでしょうか」

「あれはもう人間には、どうしようもないところまで行ってしまった」

「そんな」

そう言いつつもあたしは納得していた。あの火柱は人が生み出せるものじゃない。人にどうにかできるものでもない。

「あれを止めるならば、王魚が知る手段は一つきりだ」

「それを聞いてもよろしいかしら」

一体どんなことを言うつもりなのか。身構えたあたしに王魚は告げた。

「吾を継げ。王魚となれば止める力を手に入れられる」

吾を継げ。夢の中のあたしを思い出した。人を捨てたあたし。どういう方法で捨てたのかは思い

出せないけれど、あたしは人を捨てていた。

王魚を継ぐのが人を捨てる手段だというのならば。

あたしは……

「わかった。どうすればいいかしら？」

口から自然と言葉が出てきた。人を捨てる。その結末と言える、あの夢を知っている。

あの夢が誰かからの忠告なのかどうかも知らないあたしだけれど、もうそれしか方法がないならその方法を選ぶ。

「この剣を抜き放て」

あたしの答えを聞いて、その答えすら知っていたように笑って、王魚は自分の後ろを指さした。

そこには一体いつからあったのか、彼の下半身……魚の胴体が長々と寝そべっていた。

そこに突き刺さる一振りの剣。

夢の中の剣と酷似したものだ。とても古めかしい、時代遅れの形の剣だ。直刀で、蔵手の柄を持つた古い古い形の剣。

夢であたしがふるった剣に。イリアスさんにとどめを刺した剣にそっくりだ。

「これが吾の代替わりを封じている。これが抜ければ代替わりも行えるだろう」

「あなたを封じられるものがこの世に存在していたの？」

「是。これは神代の剣、真なる剣。生半な神は突き立てられただけで致死の傷を負う、神殺しの剣。抜き放てる者は今まで一人としていなかった」

「あたしに抜けるという確証はあるの？」

「吾は先見の力を持つ。その力が見せた。お前が剣を抜く様を」

「未来なんて不確定なものでしょう？」

「それはそうだ。吾が見る未来は分岐する道の一つ。真実かどうかは誰もわからない」

楽しそうな声で言う王魚。

王魚にとっては全てが些事なんだろうってわかる声だった。

イリアスさんがこの世をどうにかしちやっかしたとしても、王魚はどうでもいいんだろう。

それでもあたしの欲望に付き合ってくれているのだ。我儘に手を貸してくれている。「手に持ち、抜き放て」

たったそれだけの言葉を聞いて、あたしは覚悟を決めた。

イリアスさんを止めるのに、手段を選んでどうするの。

彼がこれ以上とんでもないことをしないために、あたしはこれを抜き放つ。

あたしは剣を手にとった。

途端、剣は目も眩むほど光り始める。

あたしは目を閉じた。

目を閉じて剣を握る手だけに集中する。抜かなくちゃ、あたしはこれを抜いて。

イリアスさんを止める。

剣は確かに引き抜けたのだけれど、そう思った途端に剣が消えうせた。

「ああ、主を選びに行ったのか。真の剣は王魚の孫を受け入れられなかったか」

面白そうな声で言う王魚。ニイジー・ジンは剣が消え去ったらしい方向を眺めている。

「それはどういふことかしら」

その言葉を見下ろしてくる。

「そんなものはどうでもいい。代替わりだ」

あたしの額に手をあてがいがい、王魚はどこか諦めたような声で言った。

「……残念だ、お前を失うのだから」

王魚の言葉の意味はすぐにわかった。あたしの中にいろんなものが流れ込み始めたからだ。

膨大な記憶。体が焼けるように痛むのは体が王魚になるからだろう。

痛む体と心に、意思が伝わってくる。

吾を受け入れよ、という意思が伝わってくるのだ。

吾を受け入れよ、吾と一つになれ。

吾となりそなたとなれ。

そしてその次に来たのは圧倒的な意識だった。

——全ての未練を断ち切れ。

その言葉を聞いて、あたしは知ってしまった。

王魚になったら、あたしはイリアスさんへの思いを捨ててしまうことになる。

イリアスさんを止めるというこの意思を失ってしまう。

流れ込んでくる膨大な力は、確かにこれでなかったら聴禍の風を止められるわけもないと思うほどの圧倒される力で。王魚になればこれを手に入れられるんだらう。

でもそれを手に入れたら、あたしはあたしじゃなくなるんだ。

王魚にとって世界のほとんどのことは些事。

イリアスさんが暴走したってどうでもいい。

あたしはどうして王魚が今まで、何も気にしなかったのかを理解した。

王魚はそういう風になってしまった。

イリアスさんを止めるという思いも、あたしがずっと抱え込んでいる王弟アナクレート様への恋心も、皆なくしてしまっただ。

彼の獅子のような髪が脳裏にひらめく。その笑顔も、あたしに伸ばされるその大きな手のひらも。それらが全部全部、王魚を継いだら消えうせる。

あたしはあたしじゃなくなっちゃう。

……いやよ。

あたしは閉じていた目をこじ開けた。

思い出すのはイリアスさんの声。

仕草。笑い声。笑顔。

それら全部がどうでもよくなってしまっただ。それがわかったから。

あたしは王魚を睨みつける。

「いやよ」

声に出す。

「あたしはあたしよ！ あたしの思いを馬鹿にするな!!」

叫んだ。怒鳴った。

あたしは王魚じゃない。王魚を継がなくちゃ彼を止められないと言うから、その選択を受け入れ

ようと思っただけ。

でも受け入れた結末が、世界をどうでもいいと思う心だというのならば、あたしはそれを拒絶する。

「あたしはイリアスさんを止めるのよ！」

あたしの中で力のようなものが生まれた。イリアスさんへの思いが、強大無比な力を燃え上げらせる。

そしてそれが、王魚を受け入れようとする諦めの意思と同等の思いとして爆発する。

「王魚に邪魔はさせないわよ！」

あたしは吼えた。吼えた声は世界を揺らす。

王魚が目を見開いた。そこにあつたのは驚きの感情。

「馬鹿な、この状況で吾を拒絶できるのか」

「うっさいわね！ そりゃあ、あたしだってちゃんと聞かなかつたからいけないけど！ あんたにとってあたしの思いなんてどうでもいいのかもしれないけど！ この思いばかりは邪魔させないわ！」

怒鳴っている口よりも、片手がすごく熱くなる。手の中でばちばちと、雷鳴のような音が響き始めていた。

叫んでいるその間も、あたしの中に王魚の意思が流れ込んできていて、うっかりすると流されそうになる。

無我夢中だった。無我夢中で。

「あああああ——!!」

あたしは手の中の力を王魚めがけて叩き込んでいた。

叩き込んだ力は剣の形をしていて、それは雷鳴のようなものをほとぼしらせていた。……そんなもので切られたら、さすがの神でもただでは済まない、とあたしの何かが冷静に分析している。

王魚がよろめいた。死ぬんだ、となぜかわかってしまう。

言われなくてもわかった、これは神殺しだ。

「さすが」

王魚が死ぬ間際に笑った。

「かがみの力は真の力。愛の力は実に強大だ」

それだけ言って、王魚は跡形もなく消えていた。残ったのは小さな青い欠片^{かけら}。

見やればそれは、ニイジー・ジンに吸い込まれていった。

「王魚の滅び、か」

自分の手を見ながらニイジー・ジンが言う。

「さて、上上がるうぜ、騒ぎになる前にさ」

そしてちらつとあたしを見て、笑う。

「本当に、オレの妹は物騒なものを呼び出すもんだ。かがみの剣だぜ」

そう言われて、もう一回手の中の剣を見やる。これは一体何なのか。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

夢に出てきた剣とほとんど同じ剣。王魚を封じた真なる剣と全く同じに見えるんだけど、何かが決定的に違う剣を片手に、あたしはニイジー・ジンと上上がった。上がって水面に出て、一息つく。ざぶざぶと水をかき分けて陸に上がれば、先上がったニイジー・ジンは首をぶるぶると振っていた。「なんか変な感じがするな、パーティはどうだ?」「別に……」「あー、やっぱりな」「……?」「人魚姫……人でありながら王魚の血を宿すやつのことなんだけどな、それじゃねえと王魚は継がないんだよ、器的に。パーティはそれだけの器があっただろうけど、オレにはないんだ。たぶんこの違和感はそのせいだな」「一人納得して頷くニイジー・ジン。」「あなたはこれからどうするの?」「どっかの漁村にでも落ち着くさ」「それでいいの」「まあな、そういう終わり方もあるって知っていたしき。オレはパーティみたいに何か止めたいものがあるとか愛しい相手がいるとかそんなのこれっばかりもないんだぜ。そいつのために平穩を犠牲にしたい相手なんて一人もない。うまくやれるだろうよ」

そうやってニイジー・ジンが立ち上がる。

「あばよ、妹」

「……ねえ一つ聞いてもいい？」

「あ？」

「あたしは本当にあなたの妹なの？」

「そうだが、母親違いの兄妹。異母兄妹ってやつさ」

「それは事実？」

それなら、お母様はどういった経緯であたしとクリステイアーナ姫を孕んだのかしら。

ちよつと気になった。でもニイジー・ジンに肩をすくめて言われる。

「事実じゃなくてどうするんだよ、そうじゃなかったら王魚はお前を跡継ぎに指名しなかったらうぜ」

「どうしてあたしは生まれたの？」

「……大した話じゃねえけどな。わだつみの巫女^{みこ}って女がいた。巫女は美しく清らかだったから、時の王子に見初められた。だが王子のもとに向かう途中で、海賊の襲撃にあった」

ニイジー・ジンはからからとした口調のまま話す。

「んで、その海賊の親玉がおしらの親父だった。……親父の真の名前は海賊神カナロア。カナロアの神性としようもない陽気な性格に、巫女^{みこ}はたちまち恋に落ちた。もともと王子の見た目ばかり気にする性格が嫌なのに、無理やり嫁ぎに行かされたんだから、まあ親父みたいな男に惚れ込んだの

も無理なかっただろうけどな。それで、体を重ねたんだろうよ。それでお前ができた」

さらに続く、彼の話。まるでどこかの恋物語のそれ。

「巫女^{みこ}の腹が膨れる前に、親父は海軍の襲撃にあった。王子が欲しくてたまらない女を取り戻すために差し向けた軍勢さ。さすがの親父も、何百もの戦艦に取り囲まれて、暴れまわるわけにはいかなかった。……仲間や部下が大事だったんだよ。カナロアは生き延びることができるとは、他のやつらは無理だからな。親父は自分の命一つを差し出す代わりに、仲間全員の命を守った。……最後の力だった」

「最後の力？」

「カナロアは子供に、ほとんどの力を注いでいた。そうしなけりゃ、子供が神の血に負けて死産になるからだ。オレもそうだし、お前もな。力の大部分を子供に移したカナロアの力は、とても弱かった。でも、やり遂げた。……船にいた部下や下っ端^{はた}たちを皆、ブウに飛ばしたんだ。そのせいで全ての力を失って、親父は人間と同じ死ぬ運命の存在になった」

ブウ……ブウゲンイエは海賊の街だったわね。

その言葉から悟った。もうすぐ話は終わるのだろうか。

「それでカナロアは捕まった。処刑台の上、断頭台の上で散った。……最期まで陽気に笑って、悪いことなんて何もしてない様子で、楽しそうに笑いながら、ふざけたステップでも踏みそうな調子で」

「……見たの？」

「親父の部下たちに連れられてな。ほんとは部下たちも親父を助けたかったんだが、親父が手出し無用と知らせたんだ」

「喋ったの？」

「ステップさ。親父の部下たちは、ステップの踏み方で意思疎通したんだ」

「ニイジー・ジンは呼吸を一つ置く。」

「それで親父は死んだ。お前の母親は、お前を腹の中に宿したまま嫁いだ」

「お腹に子供がいるのに、結婚できたの？」

「お前が人間の一般的な出産期に生まれてこなかったから、海賊は巫女に手を出さなかったんだと思われたんだよ。……神の子供は、三年母親の胎に宿るのにな。知らないからそう思ったんだろが」

「……あなたのお母さんと、あたしのお母様は違うのよね？」

「うちのおふくろは、ブウの無敵の占い師さ。ま、海賊があちこちの陸に複数の恋人を抱えているなんて珍しい話じゃねえ。おふくろもその一人だったわけさ。やっぱり三年妊娠してたからな、普通のガキじゃねえって察したらしい。オレが歩けるようになったら、親父に子育てを全部押し付けた。親父は子連れで、海という海を渡って暴れまわる海賊やってたんだよ」

「じゃあ、あなたはあたしのお母様のことも知っているの？」

「知ってるぜ。きらきらの銀の髪、きらきらの青い目。死ぬほどきれいな、顔にわだつみの紋章を彫り込んだ巫女さんな。のほほんとしたのに、妙にけがの手当てに詳しくて、裁縫も料理もうま

くて、甲板掃除も周りと一緒に歌いながらやる、変な巫女さん」

「……」

あたしは色々なことが引つかかった。だって、あたしが知ってるお母様は金髪なのよ。瞳だって、ハシバミ色なのよ。

大体……顔に入れ墨なんてない。入れ墨は日本の技術でも簡単には消せないのだから、この世界ではなおさらだというのに。

「それは本当に、あたしのお母様？」

「ん。だってよ、お前、目の形があの人と瓜二つだけ。ついでに声も。娘は母親と声が似るんだ。

お前の声は、あの人と同じ海鳥の声さ」

……あたしは何かを知らないらしい。何をだろう。

わけがわからなくなってきた、あたしを置いて、どこかへ歩き出そうとする彼は言う。

「そうだ、イリアスとかいうやつに会いたいんだろ？」

「ええ」

「きつと、その剣が行く先を教えてください」

ふっと笑いながらニイジー・ジンが告げる。

「なんで？」

「知らねえよ。でも王魚の残った力がそう言うてるからそうなんだろ？」

残った力。ああ、さっきの青い欠片のことね。

「わかったわ、教えてくれてありがとう」

あたしは立ち上がって、人に見つからないように気を付けて歩き始めた。

そしてさっそく、警備をしていたらしき衛兵に捕まった。

あたし一人だとこんな残念な感じになっちゃうのね……

微妙な気分になったあたしを引つ張って、衛兵は鬼の首でも取ったように威勢よく宮殿内を歩き始めた。

「痛いわ」

「神域を侵す罪人相手に遠慮などするわけがない」

「女の子の扱い方もわかってないのね」

「好きな女の扱い方はわかる」

「それはその人にとって僥幸ね」

そう言いつつあたしは、たぶんこの人と再会するだろうと思っていた人に会って、ちよつと笑いたくなった。

彼は目をこぼれ落ちそうなほど大きく開いてあたしを見つめている。

その脇には、あたしと彼を交互に見て状況を察知しようとしている人もいる。

あたしは彼に笑いかけた。

「お久しぶりです。反乱軍が収まってよかつたわ、エンデール様」

黒髪に黄金の瞳をした、女嫌いの皇太子様が、あたしを見て仰天ぎやうてんしている。

「占い師すら場所を特定できなかったお前がどうしてここにいる、アリア」

彼はあたしのことを、ミドルネームのアリアノールを縮めた愛称で呼ぶのだ。

「ちよつと王魚にお呼ばれされたのよ」

「……今さらながら、お前は一体なんなんだ」

「あたしも自分でよくわかってないわ」

あたしが拘束されているのを見て、衛兵に告げるエンデール様。

「その女を放せ」

「は、はいっ」

あたしとエンデール様が親しい間柄だと勝手に判断したらしい衛兵が、自分のした乱暴な振る舞いに青くなりながら拘束を解いてくれた。

「お前は一体今まで何をしていた？」

「それを話すと長くなるわ。話してもいいけれど、代わりに情報が欲しいの」

「北の大陸の情報か？」

「ええ。主にバスタア方面の情報よ」

災厄の炎を手に入れたイリアスさんが、次に何をするのか予想がつかない。

でもあたしの予知夢っぽい夢の中で、イリアスさんはクリステイアーナ姫を襲っていた。

そこに答えがある。

だからあたしは、クリステイアーナ姫のもとに行かなくちゃいけない。

「いいだろう。サディ、茶の用意を」

彼は脇に控えていた、片眼鏡かためがねをかけた侍従のサディさんに命令する。

「あたし急いでるの」

「急いでいる時こそ休息が必要だと教えたのはお前だ」

「あたしそんなの教えたかしら」

「凝こじった闇をどうにかするための調べ物をしていた時だ。お前はなんだかんだ言いつつも休息はきちんとしていたからな」

記憶を探ってみる。ラジャラウトスの大鉱山に現れた、凝こじった闇という化け物への対抗手段を探していた時、あたしちゃんと休んでたっけ？

覚えがない。首をひねりつつも、エンデル様が譲ゆずらないのはよく知っているからあたしは頷いた。

「手早く済ませるわ。ああでも、軽食を用意してね。あたし、お腹減ってしょうがないの」

宮殿の廊下を歩きながら、エンデル様が言う。

「ところでその剣はなんだ。旧時代の産物のように見えるのだが」

「なんだかよくわからないものよ。なんか急に出てきた」

「急に出てきた？ 呪まじない物の一種か……？ 後でドワーフあたりに鑑定をさせよう」

「あたし時間がないってさつきから言ってるじゃない」

「それはそれ、これはこれだ。その正体がかめれば、もっと有効に使えるかもしれないぞ」

「すぐにできる鑑定じゃなかったらいやよ」

「わかった」

あたしは剣を腰の帯に差し込んで、エンデル様が用意した客間に入った。

「あまり使われた形跡のない部屋ね」

「ここは俺の私的な客間で、存在自体忘れられかけている場所だ。こうして役割通りのことができるところを部屋も喜んでるだろう」

そう言いつつ長椅子に座れと示すエンデル様。あたしは大人しく座った。

長椅子の座り心地がすごくいい。びっくりするほどいい。

さすが大国ラジャラウトス。使われていない空間にもお金をかけているわね……

ちよつと感心した。バスチアだって負けていないと思うけどね。

そのまま座っていれば侍女の人たちがお茶と軽食を持ってきてくれた。そして優雅な物腰で下がる。

彼女たちが退出したのを確認してから、あたしは肩の力を抜いた。

知らない人がいる空間で肩の力を抜くほど、あたしは間抜けじゃない。

肩の力を抜いて少しだけほっとしたところで、あたしは軽食として用意されたサンドイッチに手を伸ばした。

一口齧^{かじ}って泣きそうになった。
だってこれ。

兎肉の冷製をはさんだサンドイッチって、あたしがラジャラウトスでそのおいしさにびっくりしたものの一つで、凝^こった闇の対策を立てていた時、よく侍女のアリに用意してもらったものだったから。

あたしがラジャラウトスで大好物になったものが用意されていたんだから、これが泣かずにどうすればいいというの。

もう半年以上も食べていなかったたので、懐かしさとおいしさで涙がにじむ。

西の食べ物もおいしかったけれど、やっぱり慣れ親しんだ料理が一番おいしいのは誰だって同じだと思う。

あたしが色々と噛みしめながら食べていると、エンデル様が言った。

「お前はそれが好きだっただろう。何を泣く」

「覚えていてくれたの」

「当然だ。お前の好みを忘れるわけがない。……しかしお前は、見ない間に随分と女らしくなっ
たな」

あたしをしげしげと眺めて言うエンデル様。そうだろうか。色々大変な目にあってきたから、
雄^お々しくなったと言われたら納得できるんだけど。

エンデル様はそのあと、実に言いにくそうに言った。

「前よりもずっと綺麗になった」

あたしは飲んでいたお茶を嘔き出しそうになった。

何言ってるのこの人。女嫌いが女の子ほめた！
びっくりした。

あたしが彼に視線を向けると、彼は耳まで赤くしてお茶を口に運んだ。ごまかすようにお茶を一
口飲んでから、一転して真顔になる。

「王魚の気配が消えた」

「わかるの？」

「あれだけの神性を持つ存在の気配を察せないほど、この国の住人は鈍^{にぶ}くない」

「それって他の国の住人が鈍^{にぶ}いって言いたいのか」

「身近に神性を持つ存在がいない国の住人はかなり鈍^{にぶ}いな。バスチアなどなんだあの抜けっぷりは。
それはさておいてアリア。お前が何かをしたのはなんとなく察せるのだが、何をした？ お前から
王魚の気配がにじみ出ているのだが」

王魚の気配。あたしは自分を見下ろした。

それはもしかして、王魚の代替わりを途中まで行^{おこな}ったからだろうか。

「あたし上手に説明できないわ、それでもいいのなら話すけれど」

「わからなかったら逐^{ちく}一聞^{いち}くから問題ない」

当たり前と言えば当たり前前のことを彼は言い、視線で先を促^{うなが}した。

あたしは王魚のことを話した。代替わりも、神殺しも、順を追って話していく。イリアスさんを止めようとして、人を捨てようと決意したこと。そのために新しい王魚になろうとして、できなかつたこと。王魚を斬り捨てたこと。

ちゃんと説明できただろうか。時折質問をはさまれたから、頑張つて答えた。

エンデル様はこのむちゃくちゃで真実か妄想か非常に疑問を覚えそうな話を、真面目に聞いてくれた。最後まで聞いて問いかけてきた。

「王魚は代を替えたのだな。死んだのではなく。つまり王魚の力を有する者はこの世にまだ生きているのだな？」

それを聞いて、あたしは力のほとんどを持つことになってしまったであろうニイジー・ジンも思つた。

あたしが継がなかつたから、彼に王魚の力の大部分が宿ってしまった。

力を持つていても、なんにも未練がなくて、平穏な生活を望んでいるあたしの兄さん。

エンデル様に彼のことを話したら、探すだろうか。きっと探すだろう。王魚はラジャラウトスの大事な象徴でもあるのだから。

でもそれは、静かな暮らしを願つている彼の望みじゃない。願つてもいまいだろうし、喜びもしないだろう。

だからあたしは黙つていようと決めた。

「さあ。でも王魚の血を引く者はここに座っているわ」

エンデル様には、エンデル様にだけは嘘を言いたくないと思つた。

あたしをあたしとして見てくれた人へ、口先だけのごまかしは言えない。

「あなたの目の前に座っているわ。なんの力も持っていないのだけれどね」

「——お前が？」

エンデル様が目を見開いた。あたしは頷く。

「そうなの。あたしバスタアの血なんて一滴も受け継いでないのよ。王魚があたしを女孫と言って、息子の子供だとも言つたのだから。ぶっちゃけて言えば、それしか証明するものはないけれどね」

エンデル様が大きく息を吐き出した。それから納得した様子で言う。

「いや。あの国のごたごたが一部納得できたな」

「これであたしの話はおしまいよ。エンデル様、バスタアのことでは何かご存知？」

あたしの言葉にエンデル様が答える。

「何か月も前から続く王位継承権の問題が随分と激しくなっている。今あの国はがたがただ。王も亡^ない」

「えっ……お父様が死んだの？」

あたしは信じられなかつた。お父様の、国王の死が信じられなかつた。だって病氣なんか持つていなかった。王様が直々^{じしき}に出るような戦争だつて起こっていないでしょう？

「ああ死んだ。それも七年前の王子殺害と同じ手段だ。あの国で禁忌^{きんぎ}とされている、蠱毒^{こどく}による暗殺」

「それは確かな情報なの？」

「俺はそのせいであちらの国に弔問として行かされた。王だと思われる男の葬式にも出席した。仮に隠れて生きていたとしても、公的には死亡しているな」

「下手人は？」

「不明だ。いいや、サデイ。下手人の情報は入っているか」

「あの国で蠱毒使用として指名手配されていた、中堅の術者が遺体で発見されました。バスチア内ではその男が下手人だということの話がまとまったとか。今は依頼人を調査しているという事です、まず見つからないでしょう」

「それはいつ入ってきた情報かしら」

「それによつてだいぶ状況も変わるはずだ。そんなことを思つてサデイさんを見れば、彼は片眼鏡を手で動かして答えてくれた。

「だいたい一月前でしようかね。私の手の者の情報も、内乱の激しくなったバスチアからは届くまでに時間がかかります」

「情報集めは続けておけ。何かと重宝する」

「御意」

「……今バスチアはどうなっているの」

あたしは恐ろしくなりながら聞いた。

「王女を王位につけたがつている者たちと、王弟の血を引く者を王位につけようとしている者たち

で泥沼の争いになっているな。今つつけばバスチアは簡単に手中に収められるだろう」

「陛下もそれを視野に入れているとかいけないとか」

「サデイ、そういう情報を簡単に話すな」

「それは失礼しました」

バスチアに戻るには、いささか悪い情勢だ。

内乱が起こっている国にわざわざ行くほど命知らずじゃないわ、あたしだって。

でも行かなくちゃいけないと思う。

あたしはこのソフィアヤからいかにして、クリステイアーナ姫のもとへ行くのかを考える。

あつちに行く行商とかないのかしら。この国が誇る、ドワーフの住む大鉱山との、宝石のやり取りはまだ続いているはずだ。

街道も閉鎖されてはいないだろう。

どうにかして歩いてでも近付けば、なんとかなるかもしれない。

「アリア」

「何」

「お前はバスチアに向かうつもりなのか」

「人を追っているの。話したでしょう、イリアスを追うの」

「行かせないと言ったらどうする」

「なんですって聞いてもいいかしら」

「王魚の血を引くと言っている女を、危険だとわかっている場所に向かわせるわけにはいかない」
「でもね、行くに決まっているでしょう。あたしはそのために国外追放された身の上でありながら大陸を渡ってきたのよ。イリアスがそこにいるのなら、あたしは追いかけると決めたの」

「本当のことを言っても決意は揺るがないか？」
「本当のことって何かしら」

「俺はお前が好きだから、行かせたくないのだ」

それは突然の告白だった。思いもよらない言葉だった。なんで今告白するの。

呆気にとられたあたしに、畳みかけるようにエンデル様が言う。

「愛しい女が死地へ行くのを止めない男がいるものか。行くな、アリア」

エンデル様はどうとう、あたしの腕までつかんできた。

真顔だ。そしてまっすぐにあたしを見ている。

「頼む。お前が死ぬとわかっているからこそ、止めるのだ。行ってくれな、アリア」

「……だめよ、エンデル様。あたしはあの人を追いかけなくちゃいけないの」

あたしは人を捨てなかった。だから夢で見た未来は変わったはず。

それでもイリアスさんを止めたいと思うのよ。身勝手と呼ばれても構わない。あたしは止めたい。

「あたしはイリアスを止めるの」

「アリア、なぜあの男にそうまでこだわる」

「あたしはあたしの手で引導を渡して初めて、あの人との思い出を笑うことができるの。そのため

に行くのよ」

「アリアはあの男が好きだったのか」

「大好きだったわ」

そう言いつつ過去形の言葉が、胸を焦がした。

「大好きだったの。あたしはね、けじめをつけなくちゃいけないのよ。そのためにもう一回会わなくちゃいけないの」

「やつがもう、お前の知るイリアスではないとしてもか」

「わかってんのよ、それくらいのことば。たぶん待っていればあの人はずっと一回あたしの前に姿を見せる。でもそれじゃ遅いかもしれない」

腰の剣に触りながら言う。ニイジー・ジンは教えてくれた。この剣はイリアスさんと引き合うと。

引き合った後どうなるのかは見当がつかない。あの夢のように殺し合うのか。それとも。

しばし黙ったあたしを見て、エンデル様が言う。

「だめだ、アリア。行かせない」

金の目に必死な色を浮かべて、あの女嫌いのエンデル様が、あたしに言う。

「エンデル様……」

「俺はお前を幸せにしてやりたいのだ」

「ごめんなさい、あなたじゃだめなの」

優しい人だと唐突に思う。エンデル様は結局優しい人なんだろう。



好きな女には。大事な相手には。その対象であるあたしが、それを受け取れないのはなんていう皮肉だろう。

でもあたしは決めたのだ。迷ってばかりいるけれど、これだけははっきりとさせる。

「あの人を止めてようやく、あたしは立ち止まれるの。それまでは走り続けなくちゃいけないわ」
あたしは立ち上がってエンデル様の手を振り払う。

「どうしてもか」

「うん」

あたしは頷いた。エンデル様が諦めるかと思った時。

「ならば俺は力づくでも止めてみせよう」

はつきりと言われた。彼はそのまま言葉を続ける。

「お前に人を殺せるか？ 英雄姫」

この国の大鉱山に巣食っていた、凝った闇をどうにかした後につけられた名称を皮肉のように呼び、彼が言う。

その時、目の片隅に動く何かを確認して、あたしは引きつった。扉のところにも窓の外にも、兵士たちが集まっていたのだ。

いつの間にか呼んだのだろう。それは兵士たちと一緒に外にいるサディさんの姿から、だいたい想像できた。

あの人が呼んだんだ。この事態を予想していたんだろうか。それともエンデル様とあらかじめ

立ち読みサンプル はここまで

打ち合わせをしていたのか。

どちらにしても呼吸がぴったりね。

「宮を用意しよう。王魚の血を引くお前に、ふさわしい宮を」

エンデール様が固まっているあたしに言う。

その声は最初に会った時と同じような強引きで、少し懐かしくなった。

策略だつて巡らせるわよね、さすが皇太子様といったところか。

こんな状況でも感心する。あたしに全く気付かれないように、これだけの兵を配置できるんだもの。

彼は目的のためなら手段なんて選ばないんだろう。

……正直、屈しそうになる。いいや、イリアスさんに裏切られる前だつたら、あたしは屈していただろう。

状況に流されたかもしれない。いろんなものに目をつぶって、流されるままだつたかもしれない。

「でも」

今のあたしは屈しない。それができない。

どうしよう。どうすればこれを突破できるだろう。

ただのあたしじゃ突破は無理だ。でも。たとえ捕まるんだとしたつて、最後まで抗つてやる。

その決意を見せるために、あたしは剣を握った。

そして腰から引き抜く。エンデール様の哀れむような表情。

「それがいかような呪い物かはわからないが、それでこの包囲網を突破できると思うのか？ 無駄

な抵抗はするな、俺もお前を傷つけたくないのだ」

あたしはその言葉の半分も聞いていなかった。

剣を握った途端に、感じ取れるようになったそのせいで。

握る剣が、あたしをさつきから呼んでいるのだ。

言葉じゃないもので。意思とでもいうのか、そんなもので。

それは語る。望みを言えと。

その言葉をちゃんと聞くために、あたしは目を閉じた。

「捕まえろ」

エンデール様の一声で、兵士たちがあたしに向かってくる。

そこでやっと、あたしは望みを口にできた。

「ねえ、連れて行って」

ささやく。

「イリアスのいるところに」

剣が応えた、ような気がした。次の瞬間、世界が切り替わった。

ただただ沈黙した世界。音は一つもない。視界に映るのは闇ばかり。だからあたしは目を閉じて、直感とか第六感とか呼ばれているものを研ぎ澄ます。